



# 第6期基本計画における STI政策と地方国立大学への期待 群馬大学の現状に寄せて

招待講演

総合科学技術・イノベーション会議 常勤議員

上山 隆大 先生

## 【講演の要旨】

今日は群馬大学の現状を知りたいという気持ちもあって参りました。先ほど花屋さんがおっしゃったように、われわれのトップマネジメント研修には63名ほどの卒業生がいて、そこから5人が学長になりました。最近で言うと東京医科歯科と東工大が統合した東京科学大学の初代理事長の大竹尚登さん。大竹さんは第1期生です。このネットワークが面白くて、皆さん、研修修了後も自主的にいろんな活動をしています。それで私もいろんな大学に出かけて行って、それぞれの大学の経営層の人たちと、今後の大学の研究、支援のあり方などについての議論を積み重ねています。この間は阪大に行きましたが、その時、花屋さんもおられて、「今度、東京でシンポジウムをやるので、お話をさせていただきませんか」と言われ、断れないなと思いついて出てきました。

## 科学技術振興のミッションを 明確にする

私が総合科学技術・イノベーション会議(CSTI)の常勤議員になり政策作りに携わるようになったのは2016年です。当時、頭の痛い問題は、過去20から30年間、わが国のアカデミア、科学技術全体に対する国家投資がほとんど変わらない、つまりほとんど増えていないということでした。主要国は総じて増加していました。これに関わりますが、もう一つの大きな問題は、研究力の低下が明らかだったことです。

そうした課題について内部で議論して、要するにこれは科学技術に対する国家のミッションの定義の仕方、考え方に大きな問題があるんだと思うようになりました。

た。つまり、科学技術立国についての議論で、科学技術を進展させることが中心なんだと言ってしまうと、財政などの制約があり大きなサポートが広がらない。

必要なのは、科学技術を進展させるのは一体何のためなのか、という議論。言い換えると、どんな価値を生み出すことが科学技術振興のミッションなのかを明確にすることだ、と確信するようになりました。

そのミッションを広く共有できれば、だから学術に対する支援、あるいは大学に対する支援がもっと必要だということになります。

ということで、科学技術を進展させることだけを目的とした政策の説明はもうやめよう、学術や論文の業績だけで科学技術を語ることもそろそろやめよう。そして、一体どのようなインパクトを科学技術が世界あるいは社会にもたらすのかという視点を大切にしよう——ということにしました。さらに言うと、20年、30年、50年という長期にわたる国家のあり方に関して科学技術がいかなる貢献をできるのか、ということです。

第6期の科学技術基本計画(令和3~7年度)では、こうした、価値志向型の科学技術政策を唱えました。結果は悪くなかったと思います。具体的に言うと、わが国における国のアカデミアに対する支援金は急速に伸びていて、年間10パーセントの勢いです。2024年現在の規模は2018年と比べるとほぼ倍になっているんですね。

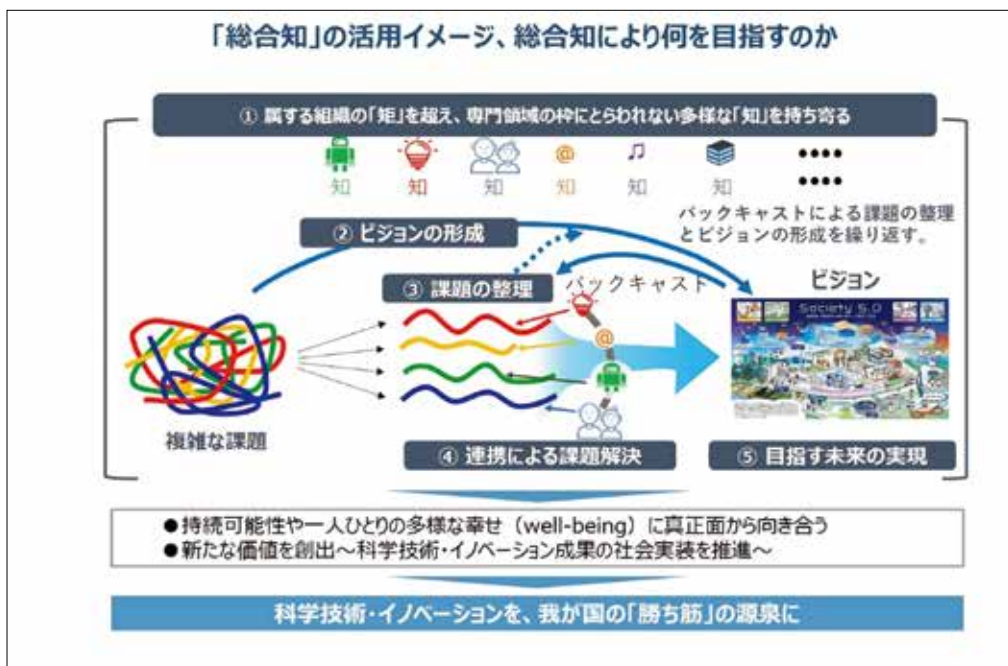
残念ながら補正予算でしか資金を取れないという課題はありますが、補正であつてもかなりのところを基金化しましたから、長期にわたって財政的な支援ができるような体制を作ってきたのが現状だと思います。

## 第6期の計画に「総合知」

第6期の計画の中に「総合知」という考え方を入れました。背景には、学問分野の境界が極めて融合的になってきているということがあります。米国のNSF(国立科学財団)が2016年に、未来に向けて投資すべき10大アイデアを発表し、この中で「コンバージェンス研究」という言葉を使っています。今日の大きな課題は一つの学問分野では解決できないため、イノベー

ション・発見を促進するためには、幅広く多様な知的領域のアイデア・アプローチ・技術の組み合わせが必要ということです。

「総合知」とは、分かりやすく言うと、多様な「知」が集まるような場をつくり、知の活力を生むことです。いわゆる学際研究を促し、社会科学も含めたオールディシプリンで大きな課題に立ち向かうということですが、求められる未来像を描くだけでなく、社会実装に向けて具体的な手段を見出して社会を変革するこ



地域中核・特色ある研究大学総合振興パッケージ

- ・「10兆円大学ファンド」と「地域中核・特色ある研究大学総合振興パッケージ」は密接に連動している。
- ・10兆円ファンドのトップ大学は、長期的には毎年数百億円が導入されるが、同時に自己資金の成長が求められる。
- ・これまでの大学政策でトップスクールに「偏在」していた資金は、それ以外の大学に移るべき。
- ・2004年から始まった運営費交付金の毎年1%の削減でトップスクール以外の大学が失った約1000億円程度の資金が、地域中核・特色ある研究大学総合振興パッケージで担保される。
- ・デジタル田園都市構想で目指す地域振興のハブとしての地域中核研究大学が果たすべきミッションを期待する。



とを目指しています。さらに、産学官でそうした考え方を共有し推進していくための方策として、場を築き、人材を育成し、その人材を新たな視点で登用していくということも含んでいます。

10兆円規模の大学ファンドを原資とする国際卓越研究大学の制度と、それとほぼ一体のものとして地域中核、特色ある研究大学総合振興パッケージを作りました。後者は、地域中核、特色ある研究大学強化促進事業という競争的資金プログラムだけでなく、特色のある研究を進める地域大学を支援するもろもろの政策群のことです。

地域中核の事業では2000億の基金を積んで、昨年12校を選び、今年度13校を選ぼうとしています。1校あたりで大体60億ぐらい入るんですが、それを使ってそれぞれの大学が10年後、20年後、30年後に世界と戦えるような大学になるのを期待しています。

基本となる問いは、まず“目指す大学像は何か”です。そして、その大学が持っているリソースを使って特色ある研究を大学の中で広げていくために、“どういう「研究のマネジメント」を行っているか”です。

学内における研究リソースの中で特色のあるものを基軸として、その大学の今後を作っていこうとされる場合、どれぐらいそのことを大学の中で認識して、大学経営をされているのか。大学の中だけでは課題に対応できない場合、どのような大学と連携して新たな価値を作り出そうとしているのか。また、地域の大学は地域の問題を背負わなければいけないということもあり、これも地域振興パッケージの大きな柱です。自治体などと連携し、大学は地域にどのような貢献をしようとしているのか。こうしたことが、この地域振興パッケージのメルクマールになると考えております。

## 地方大学の特色のある研究

CSTIは研究に関してのデータは網羅しています。群馬大学は医学部附病院を持っている中規模総合大学のグループに属しています。この中には多くの地方国立大学がありますが、附属病院を持っているということは、地域におけるヘルスケアを支えないといけないというミッションもあります。このグループの大学は、特色あるライフサイエンスの基礎研究が強いことがわかります。

そうしたことを念頭に置いて、今日、平井先生、畑田先生のお話を聞かせていただきました。ウイルスベクター開発研究のような取り組みは、地方大学の特色のある研究ではないかと思いました。畑田先生の世界的なエピゲノム研究を含め、群馬大学においてライフサイエンス研究の大きな芽が出ていることを感じさせられ、意を強くしました。

一方で、産学連携をさらに進め、国際的な共同研究を展開するような拠点になることも期待されている大学ではないかなと判断しました。

大学の共同研究、受託研究の件数、金額をみると、群馬大学は研究の金額、件数がずっと増加している大学の1つであることもわかりました。地方の大学の中で、非常にきらりと光る特色があり、企業との共同研究も含めて今後の伸び代のある大学だと思います。

今日は群馬大学の学長をはじめ先生方ともお話しする機会を得られました。いろいろと学ばせていただくとともに、今後の政策に活かしたいと思います。どうぞ群馬大学の皆様方、本当に頑張っていたいただきたいと思います。